

早稲田大学 法学部 古文 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	90分
解題	古文 香川景樹 (かがわかげき) 『新学異見(にひまなびいけん)』(一部省略がある) 歌論 漢文 『古今和歌集真名序』(抜粋) 紀淑望(きのよしもち) 歌集の序 『新学異見』 文化八(1811)年成る。香川景樹四十四歳病中の著作。賀茂真淵の『新学(爾比末奈妣・にひまなび)』を詳細に論破した歌論書。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
一	古文 香川景樹 『新学異見』歌論 漢文 紀淑望 『古今和歌集真名序』歌集の序	<p>問一ノ一 〈文法〉</p> <p>助動詞の接続と空欄に上接する語の活用形との関係を迅速にかつ正確に判断する力を試す設問。時間をかければ解ける設問ではあるが、この設問に手間取っては時間が足りなくなる、同時にミスはできない。易。</p> <p>問一ノ二 〈語釈〉</p> <p>古文に関わる知識を問う設問ではない。「内面の実質」を意味する「質」と対の意となる「文」の意を考え、選択肢の熟語の組み合う漢字の意味を見極めてゆく。そこから「文」は「もよう」や「かざり」などの「外面上の美」を表すと判断する。難。</p> <p>問一ノ三 〈空欄補入〉</p> <p>筆者・景樹の論旨、論法を把握しなければ正確に解答は得られない。空欄の前の「丈夫・婦女」が直接のヒントとはなるが、それを「鑿てり」と真淵のたとえを肯定して、「且つ…去れて見」て、景樹自らの論へつなぐという展開となっている。標準。</p> <p>問一ノ四 〈指示内容〉</p> <p>譬えるものと譬えられるものの関係、対を成した文章構造などを捉えての柔軟な読解力の養成を必要とする設問。手掛かりは、傍線部の後の「織成るものなり」と前行の「織りなすめり」との対応、或いは「彼の手に任せて」と「去れば</p>	難 (昨年 に 比べ 難 化)

	<p>猥に…非ざるなり」との因果関係の文脈。標準。</p> <p>問一ノ五 〈傍線部訳〉 本文の内容、構造、論旨を文章の部分と全体から把握できるかを問う設問。微視的に見ると傍線部の下の「似せん」の目的語が「移し上れる(モノ)」である、巨視的に見ると真淵の主張「万葉集…に似ばや」に対する景樹の異見が「移し上れるに似せんすとも得べけんや」であるという双方の観点で判断し、選択肢からそれに該当するものを選ぶ手続きが必要。やや難。</p> <p>問一ノ六 〈内容一致〉 選択肢が古文であるゆえ、難解な設問となっているが、真淵の主張は注1に示されたように、古今集の批判であり、[Ⅲ]に見えるように万葉集を尊重することにある。設問全体の状況判断、本文の内容の取捨などの視点からの思考力を要す設問。難。</p> <p>問一ノ七 〈内容一致〉 批評としての歌論の論旨の展開、景樹の論法をもマクロに見据えて読み解くだけの読解力が必要。万葉集と古今集を男女に譬えたのは真淵であるが、景樹はこの方法は認めながら内面的で批判する、一首の譲歩とも言える論法を採る。本文の「鑿てり」が鍵となるが、現代語でも「うがった見方」という言い方をし、「うがっ」は真相をたくみにとらえる意で肯定的内容。標準。</p> <p>問一ノ八 〈漢文〉 (1) 〈返点〉 昨年の法学部は融合文の中での出題であった漢文も、設問は返点を付すものであった。二年連続の出題。些か構造は複雑ではあるものの、(2)の脱文を参照すればより正答は得やすい。漢文の対策を講じておけば平易。 「萎める花の彩色少しといへども薫香あるがごとし。」と訓む。</p> <p>(2) 〈脱文補入〉 空欄に漢文を補い入れる問題。典型とは言えない形式であるから、冷静な判断によって解き方の糸口をつかみたい。譬えられるものと譬えるもの(脱文)との関係を甲乙丙のいずれからか考え、相互の関係を</p>	
--	--	--

		も考慮して判断する。難。	
--	--	--------------	--

〔総合コメント〕

分量：増加。昨年と比べると、漢文の設問が独立した上に、古文の本文の分量は増加した。過去三年を見ると 01 年『たまきはる』は 800 字強、02 年『源氏物語』がおよそ 650 字で漢文は出題されず、昨年 03 年『花鏡』は古文漢文の融合文で 1000 字強、本年は漢文が独立し、古文は 1150 字強とかなりの増加。設問数は、漢文が独立し小問 2 問となったので全体としても増加した。

出典：稀。出典も出題されることは珍しく、また近世の歌論も多く出題されるものではない。しかし早稲田大学では 99 年・法学部『雲上歌訓』、98 年・教育学部『初学考鑑』、03 年・教育学部『毎月抄』『詠歌大観』と出題されている。

形式：文法・空欄補入・語釈・指示内容・内容一致など形式的には特異なものではない。ただし単純な知識を問うものは少なく、また問一ノ六は選択肢が古文であることなど、深い思考力・判断力・対応力などを要する高度な設問と言える。